

「みんなと同じ教室」って、本当は何のこと？

—— 国連が日本の教育に求めていることを、一緒に考えてみませんか

保護者の皆さまへ

「インクルーシブ教育」「国連の勧告」という言葉を耳にすると、なんとなく難しそう、あるいは「今のうちの子の学校生活を否定されているのでは」と感じてしまう方もいらっしゃるかもしれません。今日は、その内容をできるだけみくだいて、皆さんと共有したいと思います。

国連が言っているのは「学校に入れるかどうか」ではない

まず大事なことからお伝えします。国連が問題にしているのは、「特別支援学校や支援学級に通っている子がいること」自体ではありません。

国連が本当に問うているのは、こういうことです。

「今の日本には、"普通の学級"と"特別な学級"という、最初から分かれた2本の道があって、多くの場合、障害のある子はそのどちらかを"選ばされて"いませんか？ 本当は、1つの学校・1つの学級の中に、多様な子どもたちが必要な支援を受けながら一緒に過ごせる仕組みがあるべきではないですか？」

つまり、今ある特別支援教育を「なくせ」と言っているのではなく、**すべての学校・すべての通常学級が、支援の必要な子を迎え入れられるだけの体制を持つべきだ**、という話なのです。今のように「専門的な支援は特別支援学級・学校に行かないと受けられない」という状態そのものが、国連の目にはひとつの「分けられた仕組み」に映っている、ということです。

「うちの子は今の環境に満足している」という気持ちは、間違っていない

ここがいちばん大切なところです。

お子さんが専門性の高い先生に見てもらえて、落ち着いて過ごせて、保護者としても安心している —— その気持ちは、まったく否定されるべきものではありません。今の日本では、通常学級に十分な支援体制がない中で、特別支援学級・学校が現実的に「いちばん安心できる選択肢」になっている、というご家庭が多いのは当然のことです。

国連や私たちが問いたいのは、「その選択が間違っている」ということではなく、

「もし通常学級のほうにも同じくらいの支援体制と専門性があったなら、それでも同じ選択をしましたか？」

という問いです。今、多くのご家庭が「別の場」を選んでいるとしたら、それは自由な選択というより、「通常学級では十分な支援が受けられないから、仕方なく」という側面が大きいのではないか——これが国連の問題意識であり、私たちが取り組んでいる要望活動の出発点でもあります。

私たちが目指しているのは「今の安心を奪うこと」ではない

私たちの会が国や県に求めているのは、次のようなことです。

- ・ 通常学級の先生方が、発達障害のあるお子さんへの理解と対応力を持てるようにすること
- ・ 「特別支援」に集中している予算や専門性が、通常学級にも行き渡るようにすること
- ・ どちらを選ぶにしても、それが本当の意味で「自由な選択」であるようにすること
- ・ 何より、お子さん本人の気持ちや意思がきちんと尊重される仕組みをつくること

つまり、今すぐ「みんな同じ教室に」という話ではなく、**将来、どちらの場を選んでも安心できる社会に近づけていくための、時間のかかる制度づくりの話**です。

なぜ今、声を上げる必要があるのか

今の日本の制度に満足しているご家庭が多いという実感は、私たちもよく理解しています。だからこそ、この活動は「今すぐ変われ」という急進的な要求ではなく、**次の世代、また今のお子さんたちの将来の選択肢を広げるための、長期的な働きかけだ**とご理解いただければと思います。

今の安心を否定するのではなく、「その安心が、より広い選択肢の中で得られる社会」を目指す——それが、私たちがこの問題に取り組んでいる理由です。

ご意見やご質問があれば、ぜひ事務局理事会までお寄せください。皆さんと一緒に、この問題を考えていきたいと思っています。